

関東大震災 朝鮮人虐殺から90年



一刻も早い戦後補償の実現を！

今から90年前の1923年9月1日午前11時58分、マグニチュード7.9、最大震度7という大地震が関東地方を襲いました。死者・行方不明者10万人以上と言われる被害をもたらした関東大震災です。東京・横浜の市街地では3日3晩燃え続ける火災があったと言われています。

そのとき同時に、関東一円で軍・警察や自警団に組織された日本人によって6000人以上もの朝鮮人が虐殺されたことをご存知でしょうか？

その9月1日は今では「防災の日」とされ、その前後に毎年日本全国で防災訓練やキャンペーンがくり広げられ、自然災害への備えの重要性を改めて確認する日となっています。しかし、関東大震災下での朝鮮人虐殺という「人災」については、「防災の日」に語られることはほとんどありません。世界的に見ても極めてまれで、かつ残酷なこの事件を、私たちは決して忘れ去るべきではありません。

◆関東大震災と朝鮮人虐殺

関東大震災の混乱の中で、朝鮮人が「船に乗って攻めて来る」「暴動や放火を起こしている」「井戸に毒を投げ入れている」などの「デマ」が流れました。そして2日には戒厳令が発布され、出動した軍隊は何の罪もない多くの朝鮮人を「朝鮮人である」という理由だけで虐殺していきました。このような軍隊の行動は「デマ」に信憑性を与えることになり、関東一円に瞬く間に広がって、日本人民衆の「不安」を朝鮮人への「憎悪」「敵意」に変えてしまったのです。

各地で在郷軍人を中心に自警団が組織され、ごく普通の日本人がカマ・くわ・とび口などで武装して、「十五円五十銭」の発音の違い（朝鮮語は特に語頭が濁らない）などによって朝鮮人であるかどうかを識別しながら、見つけ出した朝鮮人を次々と虐殺しました。当時、関東在住の朝鮮人はおよそ2万人とされており、その3分の1が虐殺されたことを見るだけで、その恐ろしさがわかると思います。

この事件の背景には、当時、日本国内では米騒動や労働運動、植民地支（ウラヘ）

アジェンダ・プロジェクト 京都

〒601-8022
京都市南区東九条北松ノ木町37-7
TEL&FAX 075-822-5035
E-mail agenda@tc4.so-net.ne.jp
URL <http://www3.to/agenda/>

配下の朝鮮半島では全土に広がった「3・1 独立運動」(1919 年)をはじめ独立運動が激しさを増しており、日本政府に対する民衆の不満が高まっていたことがあります。権力者らは、この震災によって日朝民衆のそうした不満が一つになって反政府運動として爆発することを恐れ、日本人民衆の不満の矛先を朝鮮人に向けさせることを考えたのです。「デマ」の出所は今もよくわかってはいませんが、確かなことは日本政府がこの「デマ」に信憑性を持たせて、日朝民衆を分断し、反目させることに利用したことです。

この事件は日本人が官民一体となって多くの朝鮮人を虐殺した世界史的に見ても大事件です。これ以降、日本政府の民族排外主義は一層深まり、一般の日本民衆にも朝鮮—アジアへの差別意識が深く浸透していきます。その結果、日本は 2000 万人ものアジア民衆を犠牲にした侵略戦争に突き進むことになったのです。

◆加害の歴史を見つめ反省すること

日本政府は今日に至るまで、この虐殺事件に対する真摯な反省や謝罪どころか、被害の調査すら行っていません。むしろ事件の直後には犠牲者の遺体を隠すなどの隠蔽工作すら行っています。

そしてこの事件だけでなく、政府は朝鮮—アジアへの侵略・植民地支配の歴史に正面から向き合うことを一貫して避け続けてきました。それどころか今の安倍内閣は、多くの日本人の無関心をも利用して、逆に歴史の偽造すら画策しています。

ところが隣の韓国では、近年、植民地期に受けた被害の補償を求める動きが一段と強まっています。今年 7 月にはソウル高裁と釜山高裁で、植民地期に強制労働をさせられた韓国人元徴用工に対する新日鉄住金・三菱重工への損害賠償を命じる判決が下されました。また一昨年には憲法裁判所が韓国政府に対して、日本軍「慰安婦」問題について正式に日本と交渉するよう決定を下しています。これらは、今が「被害者が生きているうちに補償を実現する最後の機会」という切実な思いが韓国社会全体に広がっていることの反映でもあるのです。

日本政府は韓国との間での補償問題について、1965 年の日韓条約(請求権協定)で「解決済み」という姿勢をとりつづけ、韓国内で高まる声に非難を浴びせています。しかし、それでいいのでしょうか？ 日韓条約には植民地支配に対する賠償はおろか謝罪や反省の言葉一つありません。当時の日・米・韓の各々の思惑から、歴史問題が先送りされたからです。だから今、日韓条約そのものが議論されるべきなのです。

加害の歴史を見つめ反省することから始めることで、初めて東アジアに平和で友好的な未来を創ることができるのではないのでしょうか。 (2013・9・1)